



福島で放射線量測定に同行／地味な活動で風化に抗う

東京電力福島第一原発事故から9年目、18回目の測定に同行した。福島県浪江町の35カ所を1日で巡り、地上1㍎と1㍎の高さの放射線量を測り、記録していく。うち5カ所では土も採取。地図とにらめっこしながら、車で移動しては降り、線量計を見つめ、シャベルで土をポリ袋に入れる地味な作業だった。

記者はこれまでも原発事故の「測定調査報道」として、福島と旧ソ連・チェルノブイリの汚染地帯、東京湾などで、線量と土や農作物の放射能濃度を測ってきた。どこを調べれば、実態の表現が過小や過大にならないか。考えながら、忍耐も要る。だから測定は複数人でやらないと、途中で心が折れてしまう。

今回も測定は、地元の住民と東京や名古屋からのボランティアが、2人1組になって進められた。そこには、心が折れるのを防ぐのと、現状を住民の言葉で福島の外の人たちに伝える意味がある。記者と組んだのは、南相馬市小高区の白髭幸雄さん(69)。事故発生時は福島第一原発構内にいたといい、事故後は地元の除染に携わった。「死ぬかと思うほど揺れた後、普段は構内をマイクロバスで移動する作業員たちが、そろそろ歩いて来た」と、当時の体験を移動の車中で語ってくれた。

35カ所の測定地点のうち、2カ所は台風で土砂が崩れ、堤防が決壊し、行き着けなかった。「これだけ地形が変われば、ホットスポットが移った可能性もあるね」と白髭さん。それは、定点を測り続けて初めて分かる。自分が住んでいる所が安全なのか。危険というのは風評なのか、実害なのか。実際に測ってみなければ、確証を得られない。

原発事故から9年近くたち、記憶の風化は否めない。国は福島の安全性を声高に言い、東京五輪を招致し、事故の記憶に上塗りを図る。だが、今回の測定結果からも、原発事故の影響が残っていることは明白だ。測定の取り組みを「まだやってるの?」と言われようが、まだやらねばならない現実が横たわっている。地道な測定は、風化への抗いだ。

(東京新聞〈中日新聞東京本社〉特別報道部・大野孝志)



〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞 本館5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱UFJ銀行 高畑支店(店番号297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 池田 光司

郵便振替：00880-7-108610

TEL/Fax：052-228-6813 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

【南相馬便り】

(神野 英樹)

★「第18期 測定隊」任務完了！

10/12(土)・13(日)&10/19(土)・20(日)に計画していた「第18期 測定隊」を、台風19号～21号が直撃し、測定の実施計画は大幅な変更を余儀なくされた。

とにかく「安全第一」！ 10/12～13の「第36次」は、県外からの参加者にキャンセルをお願いし、地元のメンバーだけで実施(10/26～27に「第38次」を追加)。10/19～20の「第37次」では、大雨による「浸水・土砂崩れ・道路崩れ・ぬかるみ etc.」が、測定隊の行く手を遮り、「通行止め」の看板が容赦なく立ちはだかる。台風一過で空は晴れても、測定できないポイントが多発した。しかし、地元の面々によるリカバリーで、徐々に測定ポイントの空白は埋められ、約1週間の遅れは出たものの、見事、マップの完成にこぎつけることができた。ただし、「通行止め」が今なお続く道路が点在し、測定できなかった所が約50ヶ所増加した(地図上では、灰色のマス目となっている)ことは、ご了解をいただきたい。

なお、今回の「暴風+豪雨」により、放射能が綺麗に洗い流されたのではないかと期待する人がいるかもしれない。しかし、測定に携わった一人としては、「除染されていない山林の放射能が、土砂とともに生活圏に流れ出てきた」という印象が強く、今後とも監視が不可欠であると感じる。「測定隊」は、まだまだやめるわけには行かない。

★ 信田沢搾油所 フル稼働！

今年のナタネの収穫高は、約35トン(昨年の倍以上)であった。ナタネの連作障害を回避するための「2年3作(例えば、ナタネ→大豆→稲作→ナタネ など)」や、水田の水はけ対策・雑草対策などが、少しずつではあるが功を奏し、収率が向上してきたことによると思われる。

次の課題は、搾油技術の向上である。現在、グリーンオイルプロジェクトの國弘さんが、栃木県から南相馬まで馳せ参じて、信田沢搾油所の生産性改善(特に濾過工程の技術指導)に取り組んでくださっている。鳥取県から移住した村側さんがリーダーとなり、10月からは本格的にフル稼働体制が始まった。

そして言うまでもなく、最後に控えている最重要課題は「油菜ちゃん」の拡販である。日本各地に



＜台風19号を凌いだ菜の花畑(種まき会の圃場)(10/16撮影)＞

「油菜ちゃん」の応援団ネットワークを作りたい。各地の応援団長 募集中！

★「国際ロータリー財団」から、感謝状贈呈！

10月27日に、国際ロータリー財団の福島地区大会が開催され、その会場に招かれた我が「南相馬農地再生協議会(杉内代表)」に、感謝状と記念品が贈られた。その主旨は、「農地除染後の土地作り対策」プロジェクトの助成を受け、原発事故の被災地で菜の花の栽培と搾油による営農再開を後押しし、農地の保全・活用を図るプロジェクトに組織を挙げて取り組み、多大なる貢献をした...というもの。

過大な評価をいただいたが、同財団のご支援を真摯に受け止め、今後も連携を深めていくことができればと考えている(来年3月に開かれる大会には、参加者への記念品として「油菜ちゃん」も候補に挙がっているとのこと)。ありがたいご支援である。



★ クリスマスカードで築く、友情の架け橋！

今年も、ウクライナそして日本各地から、たくさんのクリスマスカードが贈られてくる。私たち「サンタ&トナカイ」チームは、「ウクライナ→日本」の船便に遅れが出ないことを祈りつつ、日程調整に万全を期している。今年は、南相馬の「あずま保育園」や「青葉幼稚園」の子ども達(&お母さんや先生方)が、150通を超えるカードを作ってくださった。日本の各地からウクライナへ、ウクライナから日本(福島)へ、そして、福島からウクライナへ...と、友情の架け橋がかけられ、日ウ両国の子ども達の交流が始まっている。

チェルノブイリ原発事故と福島原発事故を経験して、世界のエネルギー事情は大きく変わりつつある。事故による被害の大きさ、50年以上経った今も処理の見通しがつかない廃棄物、安全対策にかかる膨大なコスト等に、世界は背を向け始めたのだ。そしてこの30年、原発と同時に世界の巨大産業に成長した「遺伝子組み換え」にも大きな壁が立ちはだかりつつある。

アメリカに危機をもたらす薬剤耐性菌

11月11日、アメリカ合衆国疾病予防センター（CDC）が、ある報告書を発表した。日本国内では全く報道されなかったが、ワシントン・ポスト紙は大きく報じた。一読し恐ろしさで背筋が寒くなる内容だった。要約すると、今、アメリカでは年間300万人が薬剤耐性菌に感染し、そのうち35,000人が死亡しているという内容だ。換算すると11秒に1人が耐性菌患者になり15分に1人が死亡しているという。CDCは重大な危機感を持ち139頁に及び報告書を発表した。感染の原因については、病院は勿論、農業や畜産、食生活、飲み水や環境など、あらゆる場で感染が広がっているという。病院では必要以上に抗生物質を使い、畜産では餌に抗生剤を混ぜているのが原因だが、それだけでは説明できない。養護施設や日常生活の場も大きな感染源だからだ。それは何故か。

最大の原因は食べ物だ。この点について何故かCDCは曖昧な説明しかしていない。筆者は以前からこのような事態が到来する危険性を指摘してきた。原因は遺伝子組み換え食品である。現在、アメリカで生産されている大豆やトウモロコシの殆どには、「マーカ」と呼ばれる細菌由来の抗生物質耐性遺伝子が入っている。培養細胞で遺伝子組換えを行うに際して、組換えが起きた細胞と起きなかった細胞を選別するために必要な技術だ。この餌を食べた家畜やヒトの腸内では、この遺伝子が腸内細菌に取り込まれて耐性菌が誕生する。これは「遺伝子の水平伝達」として古くから知られてきた現象だ。だが、遺伝子組み換え作物の安全審査を行ったアメリカの食品医薬品局（FDA）は、その危険性に長

いあいだ目をつむり、モンサントなどの遺伝子組換え企業を優遇してきた。この点は日本の厚労省の食品安全委員会も同じだ。結果的に、遺伝子組換え作物を食べた家畜やヒトは耐性菌に感染し、その糞尿や肥料、食肉の汚染などあらゆる経路を通じて耐性菌は広がったと考えられる。原発を世界に拡散し遺伝子組換え産業を育てたアメリカは、その付けを払わなければならない。モンサントやFDAは、こうした指摘に対して危険性は認め「マーカは削除する」と主張してきたが、未だにその技術はない。更に、除草剤耐性大豆やトウモロコシでは、残留農薬やその添加物による癌の発生が今、アメリカを中心に世界中で大きな問題になりつつある。この件でモンサント社は、現在アメリカで13000件に及び訴訟を起こされ、相次いで敗訴している。

ゲノム編集の未来

連載123号でも指摘したが今、日本やアメリカ・中国ではゲノム編集で沸き返っている。だがゲノム編集でも抗生物質耐性遺伝子マーカの使用は必須だ。来年中にも商品化するGABAトマトや多収穫米はじめ殆どのゲノム編集には、抗生物質耐性遺伝子が使われている。これが安全審査もなく、表示もなく市場に出回るとどうなるか。日本は高齢化問題どころではない。薬剤耐性菌に侵された子ども達までが死に直面させられる。安倍政権は、ゲノム編集の市場は今後600兆円にもなる、と期待しているが、経済を発展させる人間の存在が危ぶまれる事こそが、喫緊の課題ではないのか。アメリカの今日は日本の明日なのだ。

（2019年11月18日 河田）

クリスマスカード・キャンペーン（日本編）

（菅野 愛美）

今年のクリスマスカード・キャンペーンのカード作りを子どもたちと行うべく、学童保育施設に11月中旬に行ってまいりました。毎年、こちらの学童の子ども達は、カードキャンペーンに参加してくれています。ですが、私自身がチェルノブイリ救援・中部の活動に参加するのは約10年ぶり。10年前にインターンでお世話になっていた時にも一度伺ったことがある学童施設でしたが、とても緊張しながらの活動となりました。

子ども達のおやつの時間に機会をいただき、クリスマスカード・キャンペーンの概要を説明。その説明の途中から、「カード作るよ！」「何枚書いてもいいの？」と、なんともうれしい反応が！導入にと思い持って行った絵本『ひかりのりゅう』（絵本塾出版 文：小野美由紀 絵：ひだかきょうこ）を見せると、子ども達に「それ去年と一緒～！！！」と声をそろえて指摘されてしまい、少しひるみそうになりましたが、読み聞かせしている間も子ども達は静かに聞き入ってくれていました。読み聞かせが終わると、待ちきれんとばかりに子ども達は、道具箱から紙とペンを持って机に着き、それぞれ思い思いにカード作りを開始。それまでの「子ども達にこのキャンペーンの意義が伝わるだろうか？書いてくれるだろうか？」という私の不安は、すぐに目の前の元気な子ども達に吹き飛ばされたような気持ちでした。

クリスマスカードを作っている間も、パネルで持って行ったチェルノブイリと福島の子も達がクリスマスカードを受け取っている写真を見て「この子達に届くの？」「だれが持つ

て行ってくれるの？」と興味津々、1年生から6年生まで多くの子どもが参加してくれました。

でき上がるカードはどれもそれぞれの個性が光るもので、次から次へとたくさんカードを書いている子もいれば、一枚に集中してシールや飛び出す絵本のような仕掛けで工夫をしている子、中にはウクライナ語に挑戦している子まで、さまざま。約2時間で約50枚のカードができました。また、子どもを迎えに来たご家族の方にも、学童職員の方がなぜクリスマスカードを作っているのかを説明してくださり、とても協力的であたたかい雰囲気の中でカードキャンペーンを行うことができました。

前述通り、私がチェルノブイリ救援・中部とかわりを持つようになったきっかけは、10年前に名古屋NGOセンターが企画したインターンでした。インターン終了後に学業・仕事で愛知を離れ、はや10年。10年ぶりに愛知に戻り、事務所の皆さんの顔を拝見したくなって、ふらっと再訪した当事務所で、急に舞い込んできたこの企画への参加。これまで子どもとのかかわりをあまり持ったことのない私にとって、正直なところ、はじめは戸惑いもありましたが、私でも力になれることがあると実感できる一日となりました。子ども達の純粋な「困っている人の力になりたい」という気持ちが、これからの私の原動力ともなりそうな、今ではそんな予感もしています。

最後に、この日に子ども達が書いてくれたカードの中から、言葉を抜粋させていただきます。



『みんなへ みんなだいじょうぶだよ。なかまがいるからね。げんきにいこうね。』

クリスマスカード・キャンペーン（ウクライナ編）

「チェルノブイリの人質たち」基金理事 イェヴゲーニヤ・ドンチェヴァ

「チェルノブイリの人質たち」基金の呼びかけで、2013 年、「友好のクリスマス」というキャンペーンが開始されました。

日本の子ども達が、毎年クリスマスカードを贈ることで、ウクライナの同年代の子ども達の精神的なサポートを 25 年にわたって行ってきたことを思い起こさなければなりません。彼らは、封筒の一枚一枚にウクライナ語で「元気でね」「頑張ってるね」「仲よくしようね」といったメッセージを書きました。これらのカードを、私たちの基金は小児病院・寄宿制学校・サナトリウム・ナロジチ町「お陽さま」幼稚園・ナロジチ・オヴルチ・コロステン各地区の学校に届けてきました。

キャンペーンは毎回ひと月にわたって行われます。私たちが受け取った生徒たちの作品には、個人が作ったものも、グループで（例えばクラス全員で）作ったものもありました。葉書大の絵や手作りのカードに、子ども達は自分の名前と住所、年齢と学校名を書きました。

これまでのキャンペーンについてのデータを少しお知らせします。

2013 年・・・5 つの地区と 4 つの地区中心地が参加しました。私たちはカードを名古屋市、二本松市、福島市に送りました。

2014 年・・・51 の施設が参加し、20kg 近くのカードが集まりました。

2015 年・・・14 地区の 54 の施設（学校・幼稚園・病院・サナトリウム）が参加し、1,350 通のカードが集まりました。発送した小包の重量は 23kg でした。

2016 年・・・40 の施設が参加し、800 通・27kg のカードが日本に送られました。

2017 年・・・78 の施設から 39kg のカードが集まりました。ジトーミル市の幼稚園や学校が特に積極的に参加しました。日本への送り先として、新たに三島中学校（新潟県長

岡市）、愛知学院大学、醸芳小学校（福島県伊

達郡）、レインボー・ハウス（福島市）が加わりました。

2018 年・・・64 の施設が参加し、24kg のカードが集まりました。2017 年 12 月にウクライナに來られた先生のおられる豊橋創造大学の学生たちも、キャンペーンに参加しました。

今年のキャンペーンも成功裡に終了しました。参加者はジトーミル市の 13 の学校と 19 の幼稚園、2 つの芸術センター、2 つの病院、地区の学校と寄宿制学校が 50 でした。私たちは 1,700 通（36kg）のカードを受け取って発送しましたが、その他多くの手工芸品もありました。

日本で私たちのカードを受け取るのは、静岡サレジオ小学校、「チェルノブイリ救援・中部」、愛知学院大学、豊橋創造大学、宮内中学校、CheFuKo 基金です。

毎年、新年の祝日を前にして、私たちの基金の事務所に日本の友人たちからの最初の小包が届きます。

実質上 12 月の間中（時には 1 月にも）、私たちは日本の子ども達のお祝いのカードを、学校・幼稚園・医療施設に発送し、遠い日本の友人たちのことを話してきました。日本の子ども達や親御さんたちの見事な作品に、本当に感激した先生や保育士の方々から、多くの感謝のお電話をいただいています。

ウクライナと日本の間には 8,000 km 近くの距離がありますが、ウクライナと日本の子ども達の友情は、それによって隔てられることはなく、彼らの心は交流と愛情・慈悲の思いに対して開かれています。そして大人たちの目標は、その交流の手助けをすることです。



消防士たちに「ポータブル ガス分析器」贈呈！

「チェルノブイリの人質たち」基金理事 イェヴゲーニヤ・ドンチェヴァ

10月23日、私は慈善基金「チェルノブイリの人質たち」の理事として、ジトーミル州コロステン・オヴルチ・ナロジチ各地区の消防士たちに、日本の方々から贈与された「ガス分析器」を手渡してきました。

この夏、コロステンとオヴルチの消防士たちが、福島県の小高を訪問しました。ユーリイ・クシネルチュクとオレクシイ・ヘライモヴィチの2人です。州非常事態局医療・保健センター所長のハルヒナ・プラホタ医師も彼らに同行しました。

ウクライナの消防士たちの仕事について、小高の方々が知ることになったのは、2016年に派遣団がコロステン市の消防署を訪れ、消防ヘルメット博物館を見たのがきっかけです。その時、このコレクションに日本の消防ヘルメットも加えていただけないかという提案がありました。その後、小林さんが自らそのプレゼントを持参し、コロステン市消防署の署長、セルヒイ・ルジクに手渡したのです。

小高の人たちが設立した「希来（きら）基金」は、これまで何度も、チェルノブイリ原発事故の被災地であるジトーミル州の住民たちとの協力を、提案してこられました。今年、日本の友人の方々は、汚染地域で勤務しているウクライナの消防士たちを支援することにし、支援金を提供されたのですが、その一部で『ポータブルガス分析器3台』が購入されました。それらは、緊急事態の発生した地域で任務を遂行するにあたり、消防士たちが周囲の状況をチェックするのに役立ちます。

ガス分析器の用途は、空気中の硫化水素・酸素・一酸化炭素の含有量と、爆発の危険性がある可燃性ガスの含有量を測定することです。新しいモデルの分析器は、危険を感知した場合、3種類の警報（光・音・振動）を発

し、火災の消火時だけでなく、農場・電気やガスの事業所・下水浄化施設・鉱山・石油化学工場など、他の現場でも用いることができます。

支援金の一部は、医療センターでの診断と検査に用いられますが、消防士たちは12月14日の「事故処理作業者の日」に向けて、それらの機器を購入する予定です。

日本の友人の方々との協力が、これに終わるものではないことを、消防士たちは期待しています。このような協力はもう20年近く続いており、その間、チェルノブイリ原発事故の事後処理作業者たちと、汚染地域に住み勤務している消防士たちは、その支援（医薬品・医療機器・消防装備）の成果を、身をもって感じてきたのです。



《参考データ》

今年1～9月の間、汚染地域に含まれる地区で、ウクライナ保健省ジトーミル州検査センターの各支所において1,184検体のセシウム137含有量が測定され、うち36検体(3%)が許容値を超えていた。最も汚染が激しいのは、森で採れる食品[キノコやベリー類]と、野生動物の肉・牛乳であった。

同センターによると、キノコの検体中許容値を超えたものは15.2%。コロステン地区のものでは23.8%、オヴルチ地区では20.8%であった。森のベリーも高水準の汚染が続いている。特に、オヴルチ地区では14検体中6検体が許容値を超えた。牛乳の汚染が認められたのは、オレウシク地区の1検体においてのみであった。採取された森の産物については、食べる前に、各地区の中心地にある同センターの支所において、セシウム137の放射能を測定することが推奨されている。

福島の高校生 ドイツ派遣&再生可能エネルギー見学・報告会

＊ 伊那市(いなっせ/12月1日)と名古屋(ブラザーミュージアム/12月8日)で開催します。

(長野県南箕輪村 原 富男)

チェルノブイリ救援・中部は、昨年3月、NPO法人アースウォーカーズが行っている「福島・ドイツ高校生交流プロジェクト」の報告会を名古屋で開催しました。このグループは毎年ドイツに福島県の高校生を派遣し、「福島の現状をドイツの高校生に伝え、併せてドイツの再生可能エネルギーを学ぶ」という活動をしています。また、国内で福島の子どもの保養も実施しています。昨年の名古屋報告会は「とても良かった」ということで、「保養や再生可能エネルギー」という共通性のある活動をしている私としては、参加できず残念な思いでした。そんな私に朗報。アースウォーカーズは今年8月にも、福島県の高校生9名をドイツに派遣し、名古屋事務所に「今年も報告会開催」の打診がありました。名古屋では早速受け入れを決めました。私も是非受け入れたいと思い、後先も考えず伊那市での開催に手を上げました。

＜一人実行委員会から5人実行委員会へ＞

取りあえず、アースウォーカーズの小玉さんと日程調整。前日土曜日に山梨県で報告会があるので、その翌日の12月1日(日曜日)10時から(いなっせ)開催が決まった。できれば「無理なく人の集まれる」午後にやりたいところだが、福島の高校生は翌日授業があるので、夕方7時頃までには福島に帰らなければならない。一人実行委員会の私としては、先ず市民運動をしているグループのメーリングリストに情報を載せ、「3・11 フクシマを忘れない！」集会を行っているグループにも声をかけてみた。最初の実行委員会は何人集まるか不安であったが、私も含めた5人が集まった。

＜チラシ作りの上手な人 発見！＞

いろいろな催しは可回もやってきたが、いつも不安が付きまとう。先ず、第一の心配事はチラシだ。パソコンが苦手な私としては、名古屋で作ったものを借用して、開催場所だけ入れ替えようと思



ったが、メンバーの一人に「写真が手に入るなら作ってみましょうか」といわれ、お願いすることにした。でき上がったチラシは「高校生の写真のバックに風力発電機の羽根」が写りこんでいるもので、良いチラシ

ができた。私にはできない物で関心しきりだ。毎年「3・11 フクシマを忘れない！」集会を一緒にやっている医療生協の関係者も、最近の太陽光の野放図な設置問題に反対している人たちに声をかけてくれるそう。また、今回は高校生の話なので、高校の先生を経由して高校生にチラシを配れないかと心配してくださる方もでてきた。

＜バイオガス小野寺さん家の歩さん登場＞

メーリングリストで情報を送信した直後、長年脱原発運動を一緒にやっている酪農家の小野寺さんの跡継ぎのお嫁さん(歩さん)から電話があった。歩さんによれば、アースウォーカーズの小玉さんとはフェイスブックで友達の間柄、「宿泊も引き受ける」とのこと、びっくりしてしまった。小野寺さんの家では、30年以上前に「原発に頼らない自前のエネルギーを作りたい」といって、牛糞を原料にバイオガス発生装置を作り、以後牛舎のパイプライン洗浄のお湯と、住宅のガスも賄ってきた経緯がある。まさに、高校生の体験してきた「再生可能エネルギー」と、ドンピシャに重なるのだ。高校生たちに、ぜひ伊那のバイオガスも見てもらいたい。

今日、仕事中に歩さんから「チラシを用意しておいて！」と電話があり、その後、信州大学と高校3校、中学校に配ったからと元気な声で電話があった。「お主なかなかやるな〜」。当日、何人の方が見えるかわからないが、信濃毎日新聞や地方紙のイベント欄にも載るよう手配したし、農協の有線放送で流すコメントも美声で録音した。残すは後10日程、若い人を見習って働こう。

『福島の高校生ドイツ派遣・・・報告会』でお話したいこと

今まで心の中に留めていた思い (蛭田 里桜)

今回、夏休みを使い2週間ドイツに留学したことで、私は心も体も大きく成長することができました。ドイツに行く前は、初の海外、初対面のメンバーとの2週間に不安がありました。しかし、いざ一緒に行ってみると、一人一人が自分の考えをしっかりとって積極的に話す事ができ、このメンバーで良かったなあと思いました。



ドイツに到着して、東日本大震災の福島での8歳の体験について、英語でスピーチをするのですが、正直自分の体験を話すのに少し抵抗がありました。それは、話したら何か言われませんか？ また、当時のことを思い出したくないなあなど、の気持ちがありました。しかし、いざ多くの人の前に立ち、自分の体験を話す事で、今まで心の中に留めていた思いがあふれ出し、上手には話せませんでしたが、聞いてくれた人たちが「辛い経験を話してくれてありがとう」と、感謝の言葉を寄せてくれ励ましてもらったので、スピーチをして良かったと思いました。

またドイツの再生可能エネルギーについて、学ぶ機会がいっぱいありました。ドイツに行くまでは、再生可能エネルギーについて名前は聞いた事がありましたが、内容はほとんど知らなかったもので、興味がありませんでした。しかし、ドイツで風力発電や太陽光を始め、節電するシステムや政策などを学んでいるうちに、再生可能エネルギーの良さや、なぜドイツがこんなにもエネルギー転換を推進しているのかが分かり、日本とドイツの差を日々感じました。また日本では、原発に依存している現状があり、私たちがドイツで学んできたことを生かして、日本を変えていかなければならないと思いました。

今回のドイツ留学では、通常では体験できないことをする中、多くの事を学ぶことができました。また、自分の意見を持ち、異なる意見も

尊重することで、多様性についても深める事ができ、成長する事ができました。本当にこの夏の体験はいい思い出となりました。

ドイツで学んできたエネルギーの転換や、現地の高校生たちとの交流、そしてベルリンでは、高校生のデモにも参加しました。私たちの体験を名古屋で皆さんにお伝えするので、お会いできるのが楽しみです。



帰国して3ヶ月経っているの、少し緊張するかもしれませんが、一人でも

多くの方々に足を運んでもらえると嬉しいです。ぜひ、会場でお会いしましょう。

何か行動をしなければ何も変わらない

(戸川 華恵)

ドイツの2週間、本当にたくさんの方のご協力のおかげで、たくさんことを学びました。



特に、浪江町から避難して未だに家に帰れない私は、小学生の時に子どもから大人まで多くの人から差別を受けました。「放射線を持ち込んでいる」「賠償金を貰っているからお金持ちだ」などと、同級生から言われました。当時の私は言い返すことが出来ず、毎日泣いていました。8年たった今、少しずつ震災のことは忘れられています。そこで、学校からの案内で知ったこのプロジェクトに参加しました。ドイツでは、英語・日本語のスピーチを数回行いました。また差別を受けるのではないかと不安でしたが、会場にいた皆さんが私のスピーチを真剣に聞いてくださり、中には涙を流す方もいらっしゃいました。自分自身の重荷のような何かが無くなった瞬間でした。「何か行動をしなければ何も変わらない」「自

分の考えを伝えなければ、何も伝わらない」……そう強く思えました。このスピーチを作成するのはとても大変でした。でもスピーチをして、自分の気持ち・意見・考えが多くの人に伝わり、少し自分自身強くなれた気がしました。震災のことを話すのは怖くて怖くて仕方なかったのですが、ドイツのスピーチを終えて、そんなことないと痛感しました。また、ドイツでは再生可能エネルギーについて学びました。最初は全く興味がなかった再エネも、少しずつ学ぶにつれ、今の地球には必要不可欠なものだと気付かされました。ドイツでは、2022 年までに脱原発の動きが見られていますが、日本は福島原子力発電所の事故があったのにも関わらず、何も行動をしていません。このままならまた 2011 年のような事故が起こってしまいます。そしてまた、避難先での【放射能いじめ】が起こります。それに、日本は唯一の被爆国でもあります。どこの国よりも、放射線の恐ろしさを知っている国です。そのため、今すぐにも脱原発を目指すべきだと私は思います。でも日本はまだ、エネルギーの知識が若者には広まっていません。ドイツの高校生は、Fridays for future など環境について日本の高校生よりも詳しく、熱心に行動しています。そんな問題を解決する為にも、私は SNS などを活用して広めていけたらいいと思います。

ドイツの学校は、日本とはだいぶ異なる点が多いです。1 番びっくりしたのは、授業中に 5～6 人がずっと挙手をしている事です。また、授業は黒板をあまり使わず、先生と生徒のディスカッションのようでした。日本は板書をするのが一般的な授業なので、本当に驚きました。またその挙手は、答えるためだけではなく、質問もしていました。日本に帰って学校の授業を受ける時、先生の話をきちんと聞いて、分からないところは授業が終わったあとに、先生に聞きに行くようにしました。授業中にはまだ出来ませんが、それでも前よりは学習意欲が増しました。ドイツに行って授業風景を見ていなかったら、前と同じように授業は寝ていることも多かったと思います。

ドイツでは、数日間ホームステイをしました。

初めてのホームステイは不安しかありませんでしたが、ホストファミリーは快く私を受け入れてくださいました。英語がペラペラなホストファミリーに比べ、私は単語しか出てこないということも、少なくありませんでした。文法はごちゃごちゃだったと思います。本当に悔しくなりました。言いたいことが伝わらない、なんて言っていていか分からない。そのため、英語の勉強を一生懸命しないといけなさと実感しました。今は悔しい思いをバネに、毎日英語の勉強をしています。1 度ホストファミリーが福島に来た時に、「ドイツの時より英語が上達している」と言っているのを聞いて、GTEC や英検などの点数が上がるのを見て、英語が少しずつ身についているのを自分自身実感しました。でもまだまだ話せる訳では無いので、これからも勉強に努めていきたいです。

このドイツのプロジェクトは他とは違い、再エネ・スピーチ・ホームステイなど、様々な行事があるのにも関わらず、費用はとても安くなっています。それは、たくさんの方のご支援があったからです。ご支援して下さった方には本当に感謝しています。こんなにも私を成長させてくれて、今何をしなければならないのか気づかせてくれたこのプロジェクトは、人生の転機と言っても過言ではないです。

今回の二週間で、一言では表せないほどの経験をしました。たくさん泣いて学んで話を聞いて、笑って、体験して、本当に濃い二週間でした。最後に、名古屋の皆様。今回の報告会でお会い出来ることを楽しみにしています。是非ご参加ください。



第18期（第36次・37次・38次）空間線量率測定結果

（池田 光司）

10月に18回目の空間線量率（空間の放射能の強さ）の測定が行われました。当初、4日間かけて（2回に分けて2日間ずつ）行う予定でしたが、台風19号の影響で最初の2日間の測定が半減しました。その埋め合わせを行うために、台風が過ぎた後、翌週の平日も使って現地スタッフが測定できる地点を測定し、さらに翌々週の週末に急遽集まれる人が駆けつけて、残りの地点の測定を終了することができました。翌々週の週末の測定も、台風21号の大雨の影響を注意して回避しながらの測定でした。まず、大変な状況の中、測定に当たられた方々に、この紙面を借りてお礼申し上げます。どうしてこれだけ苦労しても測定を行うのか？ 測定のデータとマップが、現地の方々にとって役立つ情報となるだけでなく、原発事故の影響を残す大切な記録として社会的な意味が高いと考えているからです。少なくともあと1年、原発事故から10年間は、春と秋に行う測定を続けていきたいと考えています。みなさまのご理解とご支援をぜひともお願いします。

前置きが長くなりましたが、今回の測定結果のポイントをご報告します。まず、台風の影響で測定できなくなる地点が多く出ることが心配されましたが、結果的には、前回（第17期）の1,602カ所に対して、今回は1,552カ所と3%減で止まりました。したがって、継続的な変化を捉えるためには、十分な量のデータを取ることができたと考えます。その上で、各地区の平均空間線量率の変化を示したのが以下の表です。各地区の左列の数値は平均空間線量率を示していて、単位は[μ Sv/h]です。また、右列の数値は、2016年春の値を100%として、2017年秋の値と2019年秋の値がそれぞれ何%になったかを示しています。

この%の数字が小さい方が、たくさん減少したことを示します。2016年春を基準としたのは、今回作成したマップが、今回と2016年春の測定

結果を比較したマップになっているからです。

表中の%の値を見ると、南相馬市の原町区と小高区、それに浪江町と富岡町は、放射性セシウムの物理的半減期から計算される減少率（表の右端の値）よりも大きく減少していることが分かります。特に、線量率の高い地域がある浪江町と富岡町では減少率が大きく、2016年春の半分程度にまで減少しています。鹿島区は、2017年秋までは計算よりも大きく減少していますが、それ以降は横ばいとなっています。これは、2017年秋の時点で空間線量率が自然放射線レベル近くまで下がってきたためと考えられます。また、大熊町は測定を開始したのが2019年春のため、継続的な変化を見ることはできませんでした。また、今回2019年秋の各地区の平均空間線量率を比べてみると、大熊町と富岡町はほぼ同じで0.42～0.43 [μ Sv/h]、それに比べて線量率の高い山間地帯がある浪江町では倍くらいの値、逆に南相馬市では半分より小さい値となっています。チェルノブイリのホームページ（<http://www.chemobyl-chubu.jp.org/sokutei-map.html>）にも掲載する予定の比較マップと合わせて、この報告を読んでいただけたらと思います。なお、冒頭にも書きましたが、今回の測定は台風の影響が色濃く残る中で行われました。特に、台風の大雨で山間部の汚染された土壌が流されて、広がるのではないかとという心配がありました。今回の測定結果からは、全体としては心配された影響はなく、むしろ線量率は下がったという結果が出ました。上昇傾向のあった浪江町の下津島以西の地域でも、線量率は大きく下がりました。土壌の汚染調査結果を待つ必要がありますが、空間線量率の測定結果からは、汚染土壌の流出の影響はあったとしても部分的なものであったと考えられます。地域毎の詳細な結果は、マップと合わせて後日ホームページに掲載する予定ですので、ぜひご覧ください。

		南相馬市						浪江町		富岡町		大熊町		計算上 減少率
		鹿島区		原町区		小高区								
第11期	2016年春	0.189	-	0.227	-	0.296	-	1.722	-	0.861	-	-	-	—
第14期	2017年秋	0.149	79%	0.186	82%	0.219	74%	1.117	65%	0.556	65%	-	-	85%
第18期	2019年秋	0.146	77%	0.147	65%	0.185	62%	0.818	48%	0.427	50%	0.424	-	73%

第 18 期 測定隊に参加して

「あなたの会社とあなたの電力会社はどこ？」 (日野 志穂)

私は、今回初めて放射線測定に参加しました。ガイガーカウンターも初めて見て、最初は失礼ながら「なんだろう？ 不思議なおもちゃみたい」と思っていました。あとで、Amazon を見てびっくり!! しっかりと空気中の放射線を測れるものでした。ほんとに失礼しました。驚いたのはそれだけではありません。参加者の皆さんの意識の高さに心底感銘を受けました。

初日の夕食の時に、いつも参加されている方から「あなたの会社とあなたの電力会社はどちらですか？」と尋ねられたのです。私の勤めている会社は、環境問題に取り組んでいたり、チャリティにもしっかりと取り組んでいます。そして、私自身も少しはチャリティに関して知っていると自負していましたが、まだまだでした。会社がパワーシフトをした電力会社を思い出せず、自分自身はまだ、東電だったのです。ちなみに、あとで会社の電力会社を思い出しましたけれどね。そこは福島電力会社です！ そういったことで、強烈なパンチを受けましたが、皆さんのお話を伺っていると、世界をまたにかけて、世の中のために尽くしている様子が窺い知れて、心のそこから美しいと感じました。そうして、次の日から私の放射線測定が始まりました。

南相馬をビックリするくらい細かく、500m に区切って 1 つ 1 つ測定していきます。地味な作業を 1 つ 1 つこなすことが、南相馬に住んでる人たちに安心をもたらせているのだなとつくづく感じました。行政や東電がやってくれないけれど「ボランティアでやるってどういうことなんだろう？」と、憤りを感じながら。立ち入り禁止の危険なところにも入りながら測定をしてる方もいらっしゃいました。短い間でしたが、とても大切で重要な作業に関わることができて感激しました。そして、世の中の裏と表を考えることも教わりました。次回も参加したいと思います。

「放射能の影響が減衰している」ことも、大切な調査結果

(岡崎市 鈴木雅子)

私は、原発建設華やかなりし頃に、大学で原発の学科にいたこともあり、当時は「原発安全」と信じていましたが、「原発ジブシー」の本やチェルノブイリ・スリーマイルズ島の事故から、「これはまずい」と道を変えてきた者です。だから、放射能の測定というのはたいへん興味があり、今回たまたま 3 日間、日程があいていた（こんなことは珍しく、やはりご縁があったのでしょう）ことから参加させていただきました。私が一番心に残ったこと…それは「放射能の影響が減衰している」ことも大切な調査結果だということです。ともすると放射線量が高いところで「たいへんだ！」「まだまだ危険だ」という警告を鳴らすことが、測定の目的と思っていました。しかし、出発時、「海岸側はこの 10 年でずいぶん放射能が減りましたね」という話に、旅館の女将さんが「そうでしょう。減ってるでしょう。」と嬉しそうに言われました。地元の人としては「危険である」ということより、「安心して住める、人を呼べる」という思いがいかに強いかわかりました。それを知っただけでも私にとっては大きな成果です。もう一つの心に残ったことは、測定そのものではなく、浪江町の状況を目の当たりにしたということです。たまたま 1 日目を浪江町に充てていただきました。

1.0μsv/h を超える箇所があったこともびっくりでしたが、普通通り生活をしているように見える家屋が実は空き家…こんな所がたくさんありました。地元の測定隊の方の話では 10 軒に一軒しか戻ってきていないということ。「解体作業中」の看板もいくつか見ました。新築に近い家も、壊されていて、「ローンが残っているのでは？」と頭をよぎりました。大きなカーディーラーも結婚式場も空き家…去った人残った人の心はいかばかりかと思いました。みなさんが 10 年にもわたり測定を続けられてきたことに本当に敬意を表します。また機会があれば参加させてください。



2019年度上半期 活動計算書

特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部
(特定非営利活動に係る事業会計)

(単位:円)

自 2019年 4月 1日 至 2019年 9月30日

科目		金額	
【経常収益】			
1. 受取会費	正会員受取会費	111,000	324,000
	賛助会員受取会費	213,000	
2. 受取寄付金	粉ミルク支援	112,000	3,566,700
	ﾁｬﾙﾝﾌﾞ ｵﾌ 支援(医療機関)	15,200	
	ﾁｬﾙﾝﾌﾞ ｵﾌ 支援(被災者団体)	28,800	
	福島原発被災支援	94,000	
	一般寄付	3,316,700	
3. 受取助成金	ラッシュジャパン	3,000,000	3,000,000
4. 事業収益	福島支援事業	135,604	197,104
	イベント関連事業	55,000	
	啓発事業	6,500	
5. その他の収益	受取利息	6	6
経常収益 計			7,087,810
【経常費用】			
1. 事業費			3,348,839
(1) 人件費	給料手当・日当	114,000	
(2) その他経費	業務委託費	449,921	
	支援金	304,999	
	印刷製本費	407,510	
	旅費交通費	1,149,450	
	通信費	25,672	
	荷造運搬	130,557	
	賃借料	▲ 1,435	
	仕入	81,080	
	諸会費	30,000	
	支払手数料	21,085	
	雑費	750,000	
事業費 計			3,462,839
2. 管理費			724,250
(1) 人件費	給料手当	783,200	
(2) その他経費	法定福利費	5,435	
	通信費	83,045	
	水道光熱費	43,251	
	消耗品費	80,343	
	印刷製本費	42,063	
	地代家賃	390,000	
	保険料	7,730	
	租税公課	1,200	
	諸会費	30,000	
	支払手数料	36,873	
	管理 諸費	4,100	
	雑費	210	
管理費 計			1,507,450
経常費用 計			4,970,289
当期正味財産増減額			2,117,521
前期繰越正味財産額			1,512,161
次期繰越正味財産額			3,629,682

※その他の事業は実施していません。

2019年度上半期 財務諸表の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)による。

- (1) 固定資産の減価償却の方法
有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をする。
- (2) 消費税等の会計処理
消費税等の会計処理は、税込経理方式による。

2. 事業費の内訳

事業費の区分は以下の通りです。

科目	医療 機関 支援 事業	粉 ミ ル ク 支 援 事 業	被 災 者 団 体 支 援 事 業	ク リ ス マ ス カ ー ド 事 業	業 務 委 託 事 業	通 信 誌 発 行 事 業	イ ベ ン ト 関 連 事 業	派 遣 事 業	福 島 原 発 被 災 支 援 事 業	啓 発 事 業
【経常収益】										
受取寄付金	15,200	112,000	28,800						94,000	
受取助成金									3,000,000	
事業収益							55,000		135,604	6,500
その他の収益										
経常収益 計	15,200	112,000	28,800	0	0	0	55,000	0	3,229,604	6,500
【事業費】										
(1) 人件費										
給料手当・日当									114,000	
人件費計	0	0	0	0	0	0	0	0	114,000	0
(2) その他経費										
業務委託費					449,921					
支援金		304,999								
印刷製本費				2,090		74,000	3,100		328,320	
会議費										
諸謝金										
旅費交通費									1,149,150	
通信費				4,100		11,446	7,926		2,200	
荷造運搬費						122,273	756		6,578	950
消耗品費										
地代家賃										
水道光熱費										
賃借料				8,000			▲ 9,435			
仕入									81,080	
新聞図書費										
保険料										
諸会費									30,000	
支払手数料		12,058	1,710	108			308		6,901	
雑費									750,000	
為替差損										
その他経費計	0	317,057	1,710	14,298	449,921	207,719	2,955	0	2,354,229	950
事業費計	0	317,057	1,710	14,298	449,921	207,719	2,955	0	2,468,229	950
経常収益－事業費	15,200	▲ 205,057	27,090	▲ 14,298	▲ 449,921	▲ 207,719	52,045	0	761,375	5,550

2019年度上半期（2019年4月1日～同年9月30日）の会計報告を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2019年 10月 23日 監査人 神野美知江

【中間決算の概要】

◆2019年度は前年度の繰越財産額が約140万円で始まりました。また、寄付金収入が数100万円の単位で減ることが分かっていました。そのためホステージ基金とも相談をして、当初予算から例年よりも支援金を減額しました(約50万円程度)。ホステージ基金へは、皆様から寄せていただきました寄付金および会員費のおかげで、ミルク支援の費用と業務委託費を、上半期に送金することができました。

◆測定プロジェクトに関しましては、春・秋ともラッシュジャパン様から測定費用の助成をいただき(それぞれ150万円)、無事に事業を遂行できました。

◆下半期の支出金額(予定)を試算したところ、下半期に全ての事業を遂行することは困難なことが分かったため、今年度も派遣事業を中止することになりました。また、ホステージ基金への被災者団体支援事業は、これから支援金の送金を予定しています。

◆今年度の当団体の運営を無事に遂行しきるとともに、今後も当団体を継続的に運営して、ウクライナと福島を支援していきたいと願っています。皆様からいただきました当団体への支援金は大切にに使わせていただきますので、今後ご支援をいただけますと嬉しいです。

会計係 大森 融(臨時担当)

事務局便り

事務所は今、賑わいの時を迎えている。ウクライナ・フクシマの子ども達に届けるクリスマスカードが続々届き、チェル救メンバーズは発送作業に追われる。追われるというが、実は楽しむ。手作りのカードをいの一番に手に取ることのできる恩恵！ゴージャス&シンプル。とりどりの手作りカード。心しみ、おのずと作業中の口も軽やかに弾む。弾みすぎて時折大きく脱線。さて、今年もいろいろあったが、カードを送れば暮れていく…と思いきや、12月7日（土）フクシマの高校生の被災体験・ドイツ再生エネルギー体験等の報告会をブラザーミュージアムで開催。彼らの話を是非聞きに来ていただきたい。80名限定。
今年もチェル救を支えてくださり、ありがとうございました。（山盛）

寄付のお願い

今年度も残すところ4ヶ月となりました。チェル救は今年度で30年目です。そのチェル救が、30年目にして最も厳しい年度末を迎えようとしています。恥ずかしながら、来年度への繰越金を残せない可能性があります。今年度は昨年度に続き、ウクライナへの支援金を当初予算の段階で減額し、さらに下半期に予定していたウクライナへの派遣事業も中止しました。寄付金は様々な事情のため、年度当初から大幅に減ることが分かっていました。そのため、とても厳しい活動資金の状態になっています。皆様ご存知のとおり、毎年4月には放射線量測定プロジェクトがあります。年度当初に、約150万円が必要になります。昨年、一昨年とLUSHさまに助成していただいておりますが、来年度については様々な事情から継続的な助成ができないかもしれない状況のようです。原発事故の影響は長く続きます。福島で継続的に実施してきている「放射線量の測定と汚染マップ作成」は、来年度で10年目です。最も大切と思われる現状を把握する事業をなんとか続けていきたいと考えています。
いつもお願いばかりで大変恐縮ですが、ご支援を寄せていただけますと嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします。（理事一同）

編集後記

- ☆世界最貧国の一つでもあるアフリカのブルンジに、永住覚悟で嫁いだ遠縁の女性が、バイオガスを作るためのクラウドファンディングを立ち上げた。「発酵は世界を救う」だね！（佳）
- ☆5年酷使したプリンターが壊れた…「同じインクを使う機種はありません」だって。使用頻度が高いのでインクが切れると作業ができない。だから過剰にストック…それがアダになった。インクは、同じ機種を使う娘に献上。使い切るまで本体が元気でありますように…。（美）
- ☆「大臣の失言・暴言」「裁判の不当判決」「税金の私物化による公選法違反」など、特筆すべき言い逃れは数え切れないが、この詭弁だけは書き留めておかねばならない。それは、福島第一原発事故により被災した農家の方々が起こした、「原状回復訴訟」のやり直し裁判における、「司法判断」である。事故直後、放射性産業廃棄物の発生責任者である「東京電力」は、自らが日本中に撒き散らした産廃を、持ち主のいない「無主物」だと言って責任放棄したが、今回の裁判における判決はそれを遥かに凌ぐ。国（安倍政権）は、「この放射性物質は土壌と固着しており、今や農民の所有物である」...と云ってのけたのである。「モリ・カケ・原発・前夜祭」...、「安倍政治を許さない！」という国民の怒りは、いよいよ頂点に達している。（J）

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「**エーブリント**」

TEL・FAX (052) 871-9473